

令和 6 年度 第 2 回酒田市総合教育会議議事録

開催日時	令和 7 年 2 月 6 日（木）13：25～15：15
開催場所	酒田市民会館希望ホール 小ホール
出席者	矢口明子市長、赤坂宜紀教育長、神田直弥委員、阿部浩委員、工藤亜紀子委員、鶴田淑子委員（欠席のため意見書提出）
（市長部局）	前田茂男総務部長、高橋紀幸健康福祉部長、阿部美穂こども支援課長、伊藤慎司企画調整課長
（教育委員会事務局）	堀賀泉教育次長、斎藤正人企画管理課長、庄司英一学区改編・義務教育学校整備主幹、今井綾子学校教育課長、菅原智法指導主幹、前田聡子社会教育課長、樋渡隆スポーツ振興課長
議題	（１）市長講話 これからの市政運営について 教育長情報提供 第六中学校 3 年生総合的な学習 「酒田の魅力を再発見し、市長に提言しよう」 （２）酒田市こども計画（素案）について

1 開 会 （伊藤企画調整課長）

2 挨拶 矢口市長・赤坂教育長

3 協 議 （座長 矢口市長）

（１）市長講話 これからの市政運営について

パワーポイントを用い、市長より説明。

教育長情報提供

第六中学校 3 年生総合的な学習「酒田の魅力を再発見し、市長に提言しよう」

パワーポイントを用い、教育長より説明

<意見交換>

【矢口市長】

教育長のお話にありました第六中学校の発表に、私は出席できなかったのですが、担当職員が何人も出席していて、その報告を受けて、生徒たちに手紙を書いたところです。委員の皆様はいかがでしたでしょうか。

【阿部委員】

私がこどもの頃も第六中学校のような取り組みもありました。そうだね、で終わっていたものが、こどもたちが考えた思いをまち（市）に届けることができるというのはすごく素晴らしいことだと思いますし、こどもたちにとっても、自分たちが考えたことが、まち（市）の施策に反映されるということであればすごくうれしいことだと思います。社会参加できていると実感することだと思います。どの学校でもこのような取り組みはしていると思います

ので、ぜひ子どもたちの声に耳を傾けていただいて、参考になることはぜひ取り入れて、「子どもまんなか」ということですので引き続き行っていただきたいと思います。

【矢口市長】

こどもの意見を聴くということは、こども基本法の中でも市町村の努力義務と規定されておりますので、各市町村でやり始めていますね。

【神田委員】

市長のお話を聞いて、人を大切にしたいという思いが施策にちりばめられていて、市をどうしていくかを考える場合には、やはりそこに住む人を大切にしないといけないとお考えになられているのだと大変強く感じたところです。

その中で、「若者が地域から応援されていると感ずることができる」という取り組みをしていきたいというところは、大変大切なことだと思います。東北公益文科大学が、地域をフィールドとして様々な取り組みをさせていただいていますが、これが大学にとっても学生の学びの機会になるとともに、地域にとってもプラスとなり、さらに地域に愛着を感じて定着をするというような、双方にとってwin-winな取り組みができていくことは、大変重要なことですし、ありがたいことだと思います。こうした取り組みというのは、どこまで広げていけるのか、常に広がっていると思いますが、これが酒田市の強みですと言えると思います。思っていて、起業でいうとアントレプレナーシップなのかと思っています。

第六中学校の取り組みでも、生徒の皆さんが色々と課題を受けてどんなことをしたらよいかと提言をしたということですが、提言で終わってしまうのはもったいないと思います。また、この提言を受けて市の担当課が何をできるか検討することも大事ですが、生徒の皆さんも、自分たちであればどんなことができるのか、自分たちでできるレベルで考えてみて、実践をしてみる。そういったときに、例えば具体的にどう進めていけばよいかわからないということであれば、サンロクでアントレプレナーシップの育成講座を行っていますし、コミュニティ財団が立ち上がれば、実際に支援をしてくれるような形もできる。それぞれの立場で必要な時にそれをサポートしてくれる人がいて、実際に実証した結果、うまくいくこともあるかもしれないけれども、それが経験となって自信につながり、またチャレンジしていこうと思う、その一連の取り組みを温かく支えてくれる方が多くいる、そういったことが小学校から始まり、中学校でもこういう取り組みもありますし、高校でも今はアントレプレナーシップに力を入れていますし、大学でもやっています。これはずっとつながって行って、酒田をフィールドとして色々な取り組みができるとなれば、これはこどもの皆さんが、酒田に対して愛着もあるし使命感を感じていることだと思いますし、ここで頑張りたいというような思いが出てくることにつながるのではないかなと思います。

もう一点は公共交通で、確かに大事だと思います。私も酒田市の高齢者の方にアンケートを取ったことがあります。公共交通が不便なので本当は免許証を返納したいが運転せざるを得ないという方が、60歳以上だと約8%、70歳以上だと11%いるという状況になっています。公共交通ということを選択肢として考えられるようにしていくことは当然必要だと思います。

ます。

市長がおっしゃったとおり、高校生の送迎、そこは大変な課題で、保護者の方は負担を感じながら送迎をしているということが実態としてあり、また高校生はバスをうまく活用できていない。でも、アンケートでは天気が悪いときには使ったり、もう少し利便性が上がれば使いたいということを言っていますので、バスという選択肢があることは分かっているけれども、今はまだ使える水準に達していない、使い勝手の悪さがあるというようなことになっていると思います。現実的な選択肢として使えるようになり、日常的に使ってもらえるようにしていく、これを暮らしやすさの向上にも必ずつながっていくと思います。前進されることを期待しています。

【矢口市長】

小中学校では今発表があったような取り組みをやっていて、酒田市内すべての高校が、サンロクでのアントレプレナーシップ講座を受けられるようになっています。東北公益文科大学でも業を起こす取り組みがあります。それを実現するときには行政側で実現することもありますし、現在民間で力合わせてやろうということでコミュニティ財団を作りたいという動きにもなっています。神田委員がおっしゃる通り、この流れをしっかりと作り見せていけるように、令和7年度は取り組んでいきたいと思っています。

また、公共交通は令和7年度が計画改定の時期なので、その計画にきちんと合意を取りながら盛り込み、実現に向けて動いていきたいと思っています。

【工藤委員】

市長のお話の中で、令和の時代となり様々なことが以前と全く違ってきているということをおっしゃっていて、なるほどと感じました。

地域公共交通の件は、自分が高校生の時は満員のバスで通学していた時代でした。それが、こどもの数も減り、昨今ですとコロナ禍もあり、そういった公共交通を利用できなくなっているこどももいるのかと思います。やはり、親御さんの負担はかなり大きいと思うので、なんとか打破できないのかと個人的には思います。語弊があるかもしれませんが、こども自身甘えがあるというか、自分の考えでバスに乗って学校に行くということが薄れてきたのかと感じます。

第六中学校の発表について、生徒の皆さんの発想はすごく面白いと思って聞いておりました。さすがこどもたちの目線だと感じ、夢を語っているなと思いました。どうしても大人になると夢を語れなくなり、施設も老朽化とか跡地利用などの現実的なことを考えてしまう。ぜひ、こども目線の夢を夢物語で終わらせずに、何か一つでもヒントをこどもたちからもらって、実現させていく酒田市であってほしいと思います。

たくさんのこども達に関わることで、郷土愛が生まれると思いますので、ぜひこういった取り組みを引き続きやっていただきたいと思います。

【矢口市長】

工藤委員がおっしゃったことは、甘えということではなく、一定年齢になったら自分の意

志で行きたいところに行けるようになるのは当然の権利だと思います。そういう自立した人間を育てるためにも、公共交通は大事なことだと思います。

【赤坂教育長】

今回の第六中学校の取り組みは、提言という形だったので、自分たちが何ができるかという視点は少なかったのですが、小学校では自分たちで観光地の案内をしたり、修学旅行の時に、酒田の魅力のパンフレットを作って紹介したり渡したり様々な活動をしています。東京に行ったときには、伝統芸能を東京のどまんなかで踊って披露するとか、それぞれ酒田の魅力を発信することを自分たちで考えて取り組んでいるので、本当に嬉しいと感じています。

また、今回の第六中学校の発表は1月でしたが、次回はいくらか早い段階に発表会をし、市関係課の方々から色々なアドバイスをいただき、更に自分たちはこんなことができるよね、と考えることにつなげていけると、もっとこどもたちの意欲にも繋がっていくのではと考えています。今回第六中学校が初めての大きな取り組みだったので、来年度また検討していきたいと話をしています。工藤委員からもありましたが、こどもたちが生き生きしている姿を見ると、本当にこどもたちの夢が一つでも実現できればうれしいと思っています。

【矢口市長】

皆さんありがとうございました。

(2) 酒田市こども計画（素案）について

健康福祉部こども未来課長が資料をもとに概要説明。

<意見交換>

【工藤委員】

「第4章こども・子育て支援施策」の中で、評価指標と目標数値がありますが、令和11年度計画終了時のパーセントはどのような基準でこの数字になったのか疑問に思いました。

また、同じく「施策の方向性1 こどもの心身の健やかな成長のための環境づくり」の中の「基本施策3 こどもの貧困対策の推進」とありますが、「こどもの貧困対策」というところが引っ掛かり、何か違う言葉に変えられないかと思います。例えば就労困難なご家庭への支援など。考えすぎかもしれませんが、これが公になったときにいじめなどの問題に繋がらないかと思い、貧困という言葉を使う言い方にできないのかと思いました。

【阿部こども未来課長】

まず評価指標と目標数値の主なものについてのご質問ですが、こちらに関しましては、現状から一定程度の改善を目標数値とさせていただいているところでございます。あまり現実と乖離した数値目標としてはふさわしくないと考え、1割は改善したいという思いで目標設定をさせていただきました。

また、こどもの貧困対策の「貧困」について、何か違う言い方はないかというご意見でございました。確かにご指摘の通りだと思います。ただ、根拠が「こどもの貧困の解消に向けた対策の推進に関する法律」という法律であるため、どうしてもそのような言葉に引っ張られて

しまっていると思っております。現在、対象となる方へ事業の周知をさせていただくときには貧困という言葉を使わないようにと配慮をし、例えば学習支援教室をお知らせする場合は、貧困というワードは出さないなど工夫をしております。

【矢口市長】

法律に記載された用語であるということと、お知らせするときは工夫をしているということとです。

【神田委員】

具体的な施策の項目が大変多く、全部で 238 項目ということで、新しい事業も含めて様々と取り組んでいかれるのだと感じました。これだけ多くのことに取り組んでいくということは、このこども計画を通して、ウェルビーイングの実現を達成していきたいという強い思いがあるのだと感じたところです。

その上で、このように施策が並んでしまうと、どうしてもその一つ一つの施策を推進していくことが目的になってしまい、最終的に評価を見た際に、それぞれの施策で一步前進して何かが 1 % 向上しましたということで、うまくいったということになるのだと思いますが、最終的に実現したいのは、第 3 章に記載されている基本理念、すべてのこども・若者・子育て世帯が身体的・精神的・社会的に幸せな状態（ウェルビーイング）で生活を送ることが実現できているかどうかということであり、そこが大事だと思います。そこと、その施策を一步前進させることにどういう関係があるのかということを常に念頭に置いておかないと、手段が目的化してしまうということがとても気になると思います。

先ほど、数値目標の設定について、とりあえず現実的なことを考えて、現状から全体的に 1 割前進するのだというお話がありましたが、アプローチとしてはフォアキャスティングですよね。今よりも良くしようということですが、この全体にわたって 1 割前進したという状況が、ウェルビーイングという観点で見たときに、最も望ましい施策の推進の仕方なのかどうかというところはよくわからないと思います。酒田で子育てしやすいと感じるために、すべてが前進する必要があるのか。ある特定のところが突き抜けて前進すると「酒田が変わった」というイメージを与えることもできると思います。最終的に望ましい状態が設定されていて、そこに向けていくために何をするのかというところをぜひ考えて共有されているとよいと思いますし、全部を一步ずつということよりは、どこか特に力を入れて取り組んでいくというところがあった方がよいのではと思います。

今回は第一期の 5 か年計画ということになると思いますが、そこで特に力を入れて取り組んでいきたいところがどこなのか。おそらく最終的にはここに掲げられている数値目標が、全部 100% になることを目指すわけですね。100% に向けていく上で、特に今期はここを頑張るんですというようなことで、あまり進まなかったところもあるけれども、でもこの 5 か年でここはよくなりましたよねと誰もが認めるように前進したのが見える方が、酒田が変わったというふうに示せるのではないかと思います。一步ずつ前進ということで、酒田が変わったという印象を与えられるのかというところがわからない部分でもあります。一生懸命に取

り組んでいくことは間違いないことだと思いますが、取り組んでいきながら、ウェルビーイングが推進されたと誰もが実感できるような、そういう工夫があるといいと思います。

【高橋健康福祉部長】

神田委員のご意見はもっともだと思っています。目標、目的は見失わないような形の取り組み、実施すること活動することが目標ではないということは、常に市の事業をするうえで課題として捉えている部分でございます。特に今回のこのこども計画は、対象がこどもや若者になります。進めていく中で、次のステップがないという部分もあると思いますので、その点につきましては、しっかりとそれぞれ引継ぎをして取り組みを考えていきたいと思いますので、ご支援をいただければと思います。

【矢口市長】

貴重なご意見ありがとうございました。東北公益文科大学には、総合計画の評価をお願いしておりまして、その中でもご指摘いただいている点だと理解しております。

【阿部委員】

酒田市こども計画は令和7年度からということで、それに伴って新規の事業も含めて238項目あるわけですが、これだけ多岐に渡って色々と考えていただいている中で、私たちが子育て世代ですが、行政に依存しすぎない、学校に依存しすぎない、基本的には親の責任があり、親があって家庭があって、まち（市）が支えてくれるというそのシステムは崩れないようなやり方、全てまち（市）がやってあげる、学校がやってあげるではなく、基本的には家庭があるということをまず大前提に考えたらよいと思います。すべてまち（市）や学校がやってしまうと、まち（市）がやってくれないから、学校がやってくれないからという不満につながりかねないと思います。まずは、ご家庭で歯を食いしばって頑張っていただいて、足りない部分をまち（市）でサポートしますということを推し進めていっていただいた方がよいと思いました。

あと、このPDCAサイクルですが、これは次年度に向けてまたそれ以降に向けて、できたらこうしたほうが良いとか方向性を変えたほうが良いというところも、できたところもできなかったところもしっかりとつなげていって、より良いものにしていければよいと思いました。

【阿部こども未来課長】

阿部委員のご意見、大変ありがたいと思います。やはり、実際にご家庭を支援するときに、確かにその方がご家庭はよいのだろうけれども、ここまで行政がやらなければいけないものだろうかと、常々関係者の中では話題となる点ではあります。一方で、家庭の支援ということにおいては、どうしても伴走支援をしなければならないご家庭があるものですから、そういった場合は、個別に色々な事業を活用しながら、こどもが健やかに成長できるように家庭を含めた伴走支援が必要だと思いますので、そこは必要性和依存しすぎないような形を考えながら、施策を検討していきたいと思います。ご意見ありがとうございました。

【赤坂教育長】

こどもをまんやかに置いたときに、こどもと関わるものは当然家庭であり、学校であり、地域であり、そして医療であったり福祉であったり行政であったりと、こどもと関わる関係機関というものは多いと思いますが、やはりそこで顔が見える関係性というものがとても大事なのではないかと思っています。何かあったときに、顔が見えない人は信頼しにくいですし、そうになると相談はなかなか難しいわけで、日頃から定期的に情報交換などそういう場を持ち、何かあったときはすぐに動ける体制を確立しておくことをしっかりしていないと、色々な場面で慌ててしまったりうまく連携できなかったりするのではないかと思います。

今、学校では働き方改革など様々なこともあり関係性が薄れてきている感じがして、やはりそこは心配していることです。こういう時に、しっかりと集まって様々なことを確認したり話し合ったりする場を大事にしていくことで、色々なことが見えてきたり、次に繋がっていくのではないかと思います。そこを今後も大事にしていかなければならないと思っています。

【矢口市長】

質問を2点させていただきます。

神田委員から、ある特定のところが突き抜けて前進すると「酒田が変わった」というイメージを与えることもできるというご意見がありましたが、何かここを突き抜けたほうが良いのではというご意見があればお聞きしたいです。

また、何かに徹底した方が良かったときに参考とするのは、やはりアンケート結果です。子育てに関して不安感負担感を持つ保護者の割合について、何に負担を感じているのか。子育てで出費がかさむとなると、やはり経済的負担のところをしっかりとやっていかないとならないし、2番の希望通りに保育サービス利用できたと感じる割合では、希望どおりに利用できなかったというのは病児病後児保育、延長保育、学童保育でした。3番の若者が子育てしたいと思う割合においては、したいと思わない理由は交通の便が悪い、仕事がないということです。

経済的負担が大きいということは本当に認識していて、できる限り対応しているつもりですが、2番の病児病後児保育と延長保育について、今回の計画の案では特別書き込みがないような気がします。学童保育は頑張りますと書いてありますが、病児病後児保育、延長保育を担当課がどう考えているのかを聞きたいし、先ほど阿部委員がおっしゃった、行政がやりすぎない、まずは家庭が大事というのはどのあたりをさしているのかもお聞きすることで、私の理解が適切になるかと思いました。

私も会議前にアンケートの自由記載を読んでいましたが、読みきれないぐらいの意見があって、これをぜひ、健康福祉部のこども未来課だけではなく、関係部署或いは市役所全体で共有したいなと感じました。どういうふうにしたらよいのか検討していただきたいと思います。

【神田委員】

私もぜひアンケートを見させていただきたいと思います。この項目だけしか見ていないの

で、実際にどのような意見があるかというのを見れば、また意見は変わるかもしれませんが、やはり、大きく印象が変わったと感じてもらうためには、弱いところを見ていった方が良いでしょう。今のところ評価資料でみると、将来酒田で生活・子育てをしたいというところが特に低いので、このところで手を打って、ここが伸びたということは酒田が変わったなと思ってもらえるようになると思います。

【阿部委員】

答えになっているかわかりませんが、私は高校生、中学生、小学生とこどもがいたときがあるのですが、やはり送迎の問題です。それぞれクラブ活動等で朝の集合時間や場所が違って、家族の就労時間によって時間的にどうにもならないことがあります。それでも何とか対応したのですが、その他に、例えばPTAの役員、自治会、こども育成会もあります。また、学校、部活動やクラブ活動、習い事の送迎など、やはりこどもにとられる時間がものすごく多いです。それは行政がどうこうではなく、家庭が時間を作ってやるしかないと思います。そういう面で話をしました。

私はファミリーサポートセンターという機関があることを知らずにいたので、もし知っていたら利用できたなと思うところもあり、そういう情報をもっと発信していった方がいいと思いました。基本的に、お金をくださいとか支援してくださいとかよりも、まずは家庭で最大限頑張ってもらう、できないことに関しては何か支援があるかと調べられる手段が必要で、それが市民に届いていない、アンテナを張っていたつもりですけど、なかなか届かないということもありますので、意見をさせていただきました。

【矢口市長】

大変参考になりました。まずは、今あるサービスの周知ですね。ファミリーサポートセンターも含めて、病児病後児保育、延長保育もやっておりますから、まず市がやっているサービスを周知対策も含めて徹底していきましょう。

【高橋健康福祉部長】

サービスの周知の必要性というのは十分に感じているところですが、実際に課題もあります。人は自分に関係することに関しては聞いてくれるのですが、今関心がないことについては、いくら説明しても理解していただけない。例えば、小さいこどもに対する支援策というのを、市では検診や面談があるたびに、資料を用いてマンツーマンで説明をしています。でも、次に言われることは聞いていない、知らない。つまり周知の方法について、難しさはそこにあると思っています。やはり、当方としては理解をしてもらいたいのですが、聞いてもらう方々の気持ちや状況によってすべてをサポートするのは、実はなかなか難しいです。いかに制度について聞いてもらうか利用してもらうかという部分に関して個人的に思っていることは、細かい制度を周知することよりも、まずは困ったことがあったら、こども家庭センターに一言聞いてくださいというような、情報発信や周知をしていきたいと思います。制限はありますが、できることは当然行政でサポートしたいと思っています。できる限りのサポートはしますが、まずは聞いてください頼ってくださいということを市民の方々に意識づけ、

醸成していきたいと思います。細かいことを情報発信しても届かない難しさを痛感したので、内部でも相談しながら周知方法については検討してまいりたいと思います。

【阿部こども未来課長】

確かに、様々な会議でも制度の周知についてはご指摘をいただくところです。やはり、ホームページに載っています、広報でお知らせしましただけではやはり届かないのだということとは最近本当に実感しております。

現在、SNSの活用は各課で許されているものがフェイスブックしかなくて、若い人にはフェイスブックが多分届かない媒体であることや、発信する側がSNSを使い慣れていないなど、そのあたりを考えていかなければいけないと思います。また、ラインの通知の活用などもあります。例えば、来年の予算で電子版母子健康手帳の導入を検討しておりますが、それだとアプリを登録いただくと、個別に情報発信ができるようになりますので、それを活用しての周知、その年代に合わせて必要な情報を発信できるような形で行っていききたいと思います。

【矢口市長】

母子手帳電子版は導入に向けて検討していて、発信機能も付いているということなのでぜひ進めたいと思います。また、今回の件は市長公室とも共有して、市長公室でやるべきこととしてお願いをしたいと思います。新聞で読んだのですが、山形市の子育て支援ブックの表紙で、「まずは何でも相談してください」とお知らせしたという事例もありますので、色々なやり方があると思いますので、庁内で相談してください。

それでは、本日ご欠席の鶴田委員からご意見いただいておりますので、ご紹介をお願いします。

【堀賀教育次長】

私の方から鶴田委員からいただいたご意見を代読させていただきます。

～以下、鶴田委員の意見書～

私は現在、酒田市で私塾を運営しております。私自身、不登校を経験したことがあり、その経験を活かしながらこれまで数多くの不登校のお子さまやそのご家族と向き合い、支援に力を注いでまいりました。近年、全国的に不登校児童の数は増加し続けており、ここ酒田市も例外ではありません。一人でも多くのこどもたちやご家族が安心し、前を向くための勇気を得られるような「酒田市こども計画」であってほしい。そんな願いを込め、私は「施策の方向性1 こどもの心身の健やかな成長のための環境づくり」の具体的施策の中で、不登校支援についても明確に記載することを検討していただけたらと思っております。

不登校になったお子さまやそのご家族の中には、今この瞬間も胸を痛め、不安に押しつぶされそうになりながら生活されている方々が数多くいらっしゃいます。不登校の原因は一人ひとり異なりますが、こどもと家族の関係性、学校内でのこどもと大人の関わりに加え、不登校がきっかけとなつての親御さまの離職による収入減少や社会とのつながりの希薄化など、目の前に立ちはだかる壁は多岐にわたります。また、現状を打開するため、こどものために生活環境を一新しようと移住を検討されるご家庭も少なくありません。このように不登校は

その本人だけでなく、家族全体に影響を及ぼすものであり、今後もさらなる支援策を模索し続ける必要性を強く感じます。

現在、酒田市ではこどもたちの「根の力」を育てる教育が力強く推進されており、すべてのこどもたちの未来を明るく照らすさまざまな取り組みが行われています。不登校や行き渋りに関してもお子さまと日々向き合い支援を行う学校の先生方、別室対応を担う支援員の皆さま、教育支援センターの先生方に加え、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、さらにはフリースクールや学習塾などの民間支援者の方々が、それぞれの専門性を活かしながら、一人ひとりのこどもに寄り添う取り組みを続けていらっしゃいます。こうした尽力が積み重ねられていることは、不登校のお子さまやそのご家族にとって、心に灯る大きな希望となり、未来への確かな道しるべとなっています。

「酒田市は学校に通っているかどうかに関わらず、すべてのこどもたち、そしてそのこどもたちを支える大人たちを応援し、共に歩む街である。」

酒田市こども計画を通してこのメッセージがより広く伝われば、今、孤独の中で不安や悩みを抱えている方々が大きな一歩を踏みだすきっかけとなりうるのではないかと私は考えます。

令和7年2月6日 教育委員 鶴田 淑子
代読、以上です。

【矢口市長】

酒田市こども計画の中に不登校についての記載はありますか。

【阿部こども未来課長】

今現在不登校というワードは載っておりません。こども計画は素案の段階でございますので、今いただいたご意見をもとに、具体的な施策が何か考えられれば反映したいと思います。

【今井学校教育課長】

この不登校に関しては、今までも色々な場面でお話してきたかと思いますが、年々上昇しており、さらに低学年化しているというようなところで非常に教育委員会として頭を悩ませ、未然防止という形でどういようなことをしていかなければいけないかというを感じております。ただ、様々な支援の中で、例えば学校内に別室があり、その中で、個々に関われるスクールカウンセラーや学習支援員など色々な方がいるのですが、まずは学校に来れないというお子さんがいたり、それが長期化したりしているところが現状でございます。さらに、先ほど鶴田委員からのお話の中にもありましたけれども、様々な民間のサポートや、或いはふれあい教室のようなセンターもあるわけですが、実は利用率は低いと見ております。

確か、酒田市は共働き率が全国類似団体（20団体）の中で5位の中に入っていると記憶しておりますけれども、そういった働き方などもあり、先ほどから話題になっている送迎、日中のこどもの送迎というところに難しさがあるのかなと感じております。

また、教育委員会としてはまずそういったお子さん方が、家にいながらも利用できる居場所づくりということで、仮想空間メタバースの活用を現在計画しているところです。こちら

の方は、国の補助金申請を予定しておりまして、その審査が通ることを前提に現在検討しているところでございます。何とか審査が通り、新たにこれまでと違う別の居場所を作りたいと考えているところです。

【矢口市長】

やはり送迎の問題が大きな課題だということが出てきましたし、本市では女性が働きやすいまちづくりに取り組んでいます、それはこどもをないがしろにすることを意味しているわけではなく、子育てに集中できて柔軟に働ける職場を増やしていきたいということなので、そこも誤解されないようにしないとはいけません。

鶴田委員のご意見、こどもの幸せを考えたときに、不登校のことに触れられていないことは抜けてしまった点だと思いますし、これから取り組む事業もありますので、ぜひ計画に入れていただきたいと思います。また、教育委員会の令和7年度の施策を進めるにあたっては、民間で取り組んでいる鶴田委員がいらっしゃると思いますので、地域社会の動きと連携して、不登校の施策を進めていただきたいと思います。よろしくお願いします。

他にご意見はございますか。あとで思いついたことがありましたら、ぜひご意見をいただければありがたいと思います。今日いただきましたご意見は、修正すべきところは修正し、2月下旬にはパブリックコメント、そして3月27日に予定している子ども・子育て会議で決定という予定ですので、教育委員の皆様からはご意見を頂戴したいと思います。

本日はとても貴重なご意見をいただきありがとうございました。

(3) その他

【伊藤企画調整課長】

それでは2点ご報告申し上げます。

1点目は、皆様のお手元に「公立化へ始動。」というチラシを1枚お配りしております。東北公益文科大学は、2026年4月の公立化に向けて今様々準備をして進めているところでございます。その準備と並行しまして、公立化になるというPRをこれからどんどん強化していかなければならないという戦略の一環で、県の東北公益文科大学公立化準備室において、このチラシを作成したところでございます。こちらについては、これから県内の高校、図書館、JRの駅など、あらゆるところにこういった資料、チラシやポスターを配布しまして、公立化のPRを強化していくという戦略でありますので、委員の皆様からもぜひ周知いただければ幸いに存じます。

それからもう1点は、今年度の総合教育会議につきましては、特段の事情がない限り本日の会議で最後となります。来年度の会議につきましては、改めて事務局よりご連絡を申し上げますのでよろしくお願いしたいと存じます。以上でございます。

4 閉 会 （伊藤企画調整課長）